

Title	「運資源ビリーフ」に関する研究
Author(s)	村上, 幸史
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44824
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏 名	村 上 幸 史
博士の専攻分野の名称	博 士 (人間科学)
学 位 記 番 号	第 1 8 3 4 1 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 16 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科行動学専攻
学 位 論 文 名	「運資源ビリーフ」に関する研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 大 坊 郁 夫 (副査) 教 授 南 徹 弘 教 授 釘 原 直 樹 教 授 臼 井 伸 之 介

論 文 内 容 の 要 旨

一般的に、「運」は社会心理学でこれまで扱われてきた原因帰属研究で扱われている概念より幅広い形で用いられている。その中でも「運」を使うと減ってしまうような資源のような形で捉える者は数多く存在し、その考え方は強固な信念の形で所有されているしろうと (lay person) 理論的なものであると考えられる。本論文では、このような考え方を「運資源ビリーフ」と呼び、この「運資源ビリーフ」を持つ者の人物像を探り、不確実事象に対して、どのように認知や判断をしたり、行動を取ったりするのかを明らかにすることを目的として実験及び調査を行った。

第 1 章では「運」に関する様々な信念について分類が行われ、自己の「運の強さ」の認知についての調査結果から、「運」は事象の生起確率と関連する偶然性の高さとは別に、重要な状況で成功するのに不可欠な要因として捉えられていることが分かった。

第 2 章では「運が減った」とか「運の量が決まっている」という形で語られる多くの「運資源」的な言説を分析した結果、語られる中心にあるのは文脈上で妥当でない「幸運」を得た後の違和感として、ネガティブな予測が行われやすいという「運資源物語」と呼べる構造であることが明らかにされた。

第 3 章では「運資源ビリーフ」を持つ者の特徴として、事象間の独立性を誤認しやすいことが明らかになった。この原因として、迷信の信じやすさや、因果応報的な因果観を持つことから、ネガティブな結果に対する注目しやすさという、事象に対する焦点化の違いが挙げられる。さらに「運資源ビリーフ」の有無は既存の性格特性や、ギャンブラーの錯誤 (Gambler's Fallacy) の認識、「幸運」経験に対する認知の違いでは説明できなかった。

第 4 章では、このネガティブな結果に対する注目しやすさについて補足的な調査が行われ、「運資源ビリーフ」を持つ者は予期後悔をしやすく、「運資源物語」に類似した「幸運」の後に重要な状況で失敗する方向で事象の因果推測を行っていることが分かった。

これらのネガティブな結果に対する注目しやすさを元にして「運資源ビリーフ」と行動の関連性に関するモデルが立てられた (第 5 章)。第 6 章と第 7 章では「運資源ビリーフ」を持つ者は、「幸運」を得た直後には「運の減少感」や「運の定量感」が生じるために、次の不確実な選択において「良いことは続かないように」判断するのかがどうかが実験を用いて測定された。

第 6 章では、クジを用いた抽選が行われた後で、不確実な選択を行うという場면을想定してもらい、質問紙上での回答の傾向を探った。その結果「運資源ビリーフ」を持つ者がクジに的中した場合には、その後に想定した不確実な場面で、偶然性の高い選択を取った場合の成功可能性を低く見積もっていた。想定した不確実な場面の中では、クジ

を再度引いてもらうと仮定した場面で影響が最も強く見られた。しかし、この前のクジの的中が後の選択に及ぼす影響は人命救助や手術などのクジとは全く異なった選択場面にも見られたことから、「運の減少感」や「運の定量感」の要因について議論がなされた。

第7章では、ほぼ現実に類似したギャンブル場面における認知や行動の選択を測定した。その結果、予想的中した場合には、その次の予想的中する自信や賭ける割合に「運資源ビリーフ」の有無が影響していることが示された。前の予想的中していた場合には、「運資源ビリーフ」を持つ者は持たない者に比べて持ち点を賭ける量が相対的に少なく、また予想的中するという自信の度合いも低かった。この傾向は前の予想的中していない場合には見られなかった。第6章ではクジの的中したのは1度きりであったのに対して、第7章の結果からは複数回の選択においても同じ傾向が見られた。

第8章と第9章では、後の事象で成功することの重要性の意識がそれとは独立した事象に対して影響を及ぼすかどうかについての実験結果が紹介された。第8章では「運資源ビリーフ」を持つ者は、後に控える成功すべき重要な事象を意識した場合に、先行する相対的に重要度の低い不確実な選択自体を回避しやすいという傾向が示された。この実験では、クジによって重要な結果が決まるような場面の前に、このクジよりも結果の重要性が低い（がデメリットはない）クジを引くかどうか測定されたが、「運資源ビリーフ」を持つ者は「運を無駄に使わないように」重要性の低いクジを回避する傾向が強かった。

第9章では、第6～8章の結果をふまえて、先に得た「幸運」と後に控える成功すべき重要な事象への意識が、どのようにリスクテイキング行動の選択と関連するのかについての実験結果が紹介された。「運資源ビリーフ」を持つ者は、「幸運」な結果を得た後で、成功すべき重要な事象が後にある場合には、これと比較して重要度が低い不確実な事象の選択そのものを回避する傾向が高いが、成功すべき事象が後にはない場合には、その傾向は見られないという、いわば「幸運」の相対的な選択を行っているという結果が得られた。

以上の研究から判断すれば、「運資源ビリーフ」を持つ者の意識は「幸運」を得るという方向性にあるが、実際には「幸運」で得た実質的な利益よりも、「幸運」を得たことによる「運の減少感」や「運の定量感」のような心理的な損失に注目しやすく、ネガティブな結果を回避する方向に動機付けが作用しやすいと推測される。もともと「運資源ビリーフ」を持つ者は事象間の独立性を否定しやすい者であると考えられるが、「運の減少感」や「運の定量感」を認識した場合に、その傾向はさらに強まり、複数の事象が成功することに対してネガティブな期待を抱きやすくなるのではないかと推測される。

以上の結果から、「幸運」を得るという特定の状況で「運資源ビリーフ」は行動の予測子となることが示唆された。

論文審査の結果の要旨

本論文は、「運」という内的原因帰属要因（Heider、Fの社会的認知理論の重要な観点でもある）を実証的に捉えたものである。人は、日常的な様々な場面において、自らの判断や行動の成否を運に結びつけて考える傾向が少なくない。著者は、人の素朴で強固な信念として作用するこの概念を一種の「しろうと（lay）」理論的な位置づけの視点から捉えている（これを「運資源ビリーフ」と称している）。運に関する多方面の言説を収集し、「一般」の人々がいかに強力な帰属の基準として、信念として重用しているのかを明らかにした上で、それを構成する要因（判断状況、脈絡、個人要因等）を多様な人々を対象として数次に及び調査を行っている。そして、運の定量感、行動の連鎖系列における因果律の誤認（独立事象の誤関連づけ）、否定的結果の過剰視、幸運（肯定的事象）への予期後悔などの因果推測傾向を示している。これらの調査データの蓄積を踏まえ、ゲーム行動やその他の推測課題を用いた実験を行い、「運資源ビリーフ」が行動の重要な説明力を持っていることを示している。

そして、不確実事象の生起、その解釈、後の事象の予測、運の定量感、ネガティブな結果、その解釈としての運の減少感という時系列モデルをも提唱している。この運資源ビリーフ説は、因果応報、偶然性の解釈システムが「しろうと」理論として成立していること、また、必ずしも定量的に説明仕切れない不確実性を先行の社会心理学的な理論を整理しながら、多面的に考察し、まとめていることが高く評価できる。

日常性を入念に考察し、多様な研究の展開、理論的統合の調和のとれた論究は、博士（人間科学）の学位授与に十分に値するものであると判定された。